HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第8章 アイヌの人々との多様な交流 : クラスメートから結婚まで
Author(s)	小野寺, 理佳
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 33, 141-169
Issue Date	2015-05-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59152
Type	bulletin (article)
File Information	AN00075302_33_141-169.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第８章　アイヌの人々との多様な交流
――クラスメートから結婚まで――

小野寺理佳｜名寄市立大学保健福祉学部教授

はじめに

本章では、白糠町の住民とアイヌの人々との交流を取り上げる。ここでは、「交流」という語を、同じ場を一瞬共有する「出会い」から、長期にわたって継続する親しい関係性、たとえば「結婚」まで、多様な意味でとらえる。

以下、３部構成とする。まず、第１節においては、インタビューデータをもとに、これまでの生活史のなかで住民がアイヌの人々とのどのような出会いを経験し、それをどのように受けとめてきたのかを考察する。続く第２節においては､現在の日常生活におけるアイヌの人々との交流の実態、および、そのような交流を規定する諸条件を、アンケート調査のデータをもとに明らかにする。あわせて、インタビューデータのうち現在の交流についての語りを見ていく。最後に、第３節では、きわめて私的、きわめて親密な交流としての結婚に焦点を当て、和人とアイヌの結婚に対する人々の率直な思いをインタビューデータに探る。これまで道内各地で実施されてきた同種の住民調査の結果を参照することで、当該地域における交流の特徴をより明確にとらえたい。

分析にあたっては、交流の内容が年齢によって大きく異なることが予想されることから、住民を３世代、すなわち青年層（20 ～ 30 代）、壮年層（40 ～ 50 代）、老年層（60 代～）に分ける。なお、回答者のほとんどは和人であるが、アイヌ系住民もわずかに含まれる。そこで、以下においては、エスニシティと世代を組み合わせて､「和人青年層」「和人壮年層」「和人老年層」「アイヌ系住民」（以下、青年層、壮年層、老年層、アイヌ系住民と表記）に関して考察を進める。アイヌ系住民については、回答者数が少ないため、世代毎に分けずに一括して扱う。

第１節　生活史における交流

まず､インタビューデータをもとに､生活史におけるアイヌの人々との交流の様相を確認しよう。回答者は 25 人､内訳は､青年層６人､壮年層４人､老年層 13 人､アイヌ系住民２人（老年女性１人､老年男性１人）である。住民は、いつ、どのようなかたちでアイヌの人々に出会い、どのような交流を持ったのだろうか。交流の場面を、生活の場面、学校の場面、仕事の場面に分けて考察する。

第１項　日常生活における交流

はじめに、生活の場面について見る。アイヌの人々の存在を知っていたという者は多いものの、親しく付き合ったという思い出を語る者はいない。世代毎に見ると、青年層には語るだけのものをもたない者が他世代よりも目立つように思われる。生活の場面でのアイヌの人々との出会いについて振り返る時、発言の量がそもそも少ないことに加えて、「わからない」という発言がたびたび聞かれる。

・わかんないですね。そういう話、普段しないですからね。誰がアイヌだとか、そう言って。…（差別的なことを言う人は）子どもの方は多かったかな。そういうのがね、大体小さい子の方が…あのぅ、何て言うんだ…よくわかんないけどさ、そういう差別的な言葉を言う子。（青年層・男性　白糠育ち）
・何か小学校のころに「この人の家はアイヌだからね」みたいなことは聞いたことがあるんですけど、それは子どもの言うことなんで、ちょっと本当かどうかわからないみたいな。（青年層・女性　鶴居育ち）

その一方で、壮年層や老年層にはアイヌの人々の存在について具体的なエピソードを語る者が相対的に多い。とはいっても、それらのエピソードとは個別の人間関係にまつわるものではなく、アイヌの人々を見た、アイヌの人々についての話を聞いた、アイヌの人々について感想を持ったという内容であり、アイヌの人々との間にはつねに一定の距離がある。

・そこにいた頃は全然意識なかったんだよね。学校でもなんでも。…でも今考えてみると、たとえばうちの実家とかにも、アイヌの人たちは出入りはしてた。普通、父親の友人とかでいたから。（壮年層・男性　白糠育ち）
・何かよく周りの人はばかにしているというか、うちの兄なんかは昆布を取っていたものですから、「ポーチ、ポチ、ポチ」と呼ぶんですって。そしたら、何のことを言っているのかなと。「あっ、犬だ」という感じで、「ポチ、ポチ」と呼ぶんです。「まったくなあ」っていうのを１回聞いたことありますね。そんなばかにしてとかと言って、兄が怒っていたのを聞いたことがありますけどね。やっぱりみんなそういう感じで、昔は周りがきっとそういう感じだったんでしょうね。いまはもうそんなことは、それこそ人権侵害になりますよね。ですから、誰もそういうあれはしてないでしょうけれども、昔はそういう感じでした。（壮年層・女性　羅臼育ち）
・よそはわからないけれど、白糠で漁師をやっている親たちの年代って酒に飲まれる人が多くて、だからそういう部分で、さほど密な関係で友だちになる（ことはなかった…著者注）…まあ疎外しなかったし、ただこっちから飛び込むというのは少なかったと思いますね。（老年層・男性　白糠育ち）
・昔はそこで１人だけアイヌの女の人がいたんですって。それで、よく、車もない時代でしたから、道路の真ん中で一升瓶ぶら下げて、こう歩ってるおばさんがいたの。そうしたら、えーって、そういう人って、ほら、昔、ね、女の人が酔っ払ってる人なんてあんまり見たことないから、したから「あれはメノコで一人暮らしで、かわいそうなんだから」とか、そんな感じでいたの。（老年層・女性　霧多布育ち）

アイヌの人々に対する「距離をおいた間柄」としての認識は伊達の住民に見られたものに近く、新ひだかのように、家族ぐるみの近所付き合いに否応なく巻き込まれるなかで、より濃密な感情をもたざるを得なかったという経験とは大きく異なる。また、年長世代の差別的な言動への批判的なまなざしという点については、新ひだか、伊達両地域の住民と共通するところである。

しかしながら、ここで、住民の「語り口」にあらためて注目すると、アイヌの人々の存在につい

て語る際の表現の仕方として、「知っていたような気もしますね」「いたような気がする」「いるっていう認識があったかもしれない」「記憶がなんとなく残っているね」「いたんだろうねぇ。きっとね」といった曖昧な表現が頻出することに気付くだろう。自身の経験として語られてはいるが、周囲の大人たちの様子を見て察したものであったり、あるいは、大人たちからそのように聞かされていたものであったり、いずれにしても、不確かな記憶として提示される。

・（周りの大人たちが誰がアイヌだとか言っていることは）まぁ、知ってたような気もしますね。まぁ、だからどうしたみたいな感じなんですけどね。（青年層・男性　白糠育ち）
・うちの近所にはいなかった。ちょっと離れた地域には。だけど、昔、ずうっと山の近くの方にアイヌの人が住んでいたんだと思うんですね。チロリン村と言っていた地域があったんですよね。別にそういう地名が付いているわけではないんだけど、チロリン村という名前を付けていたところがあって、そこにアイヌの人がいたような気がするんだよね。それから、そこがだんだん開発されて出てくるようになってから、町場に散ったみたいな感じで、その地域はなくなりましたけどね。（そういう人たちがいることを）知っていましたね。だけど、私と同世代はたぶんいなかったと思うんですよね。だから、たぶんそこにいたんじゃないかという感じしか。（壮年層・女性　羅臼育ち）
・中学校に入って、こっちの方（白糠）に来てから、アイヌという民族というか、そういうのはいるっていう認識があったかもしれないです。（壮年層・女性　帯広育ち）
・アイヌの人がいるということは親に聞いたことがあって、何かアイヌの人がものを売りに来たことがあるんだよね。当時、親はね、ああいう人の持ってきたものを触っちゃいけない、汚いからと言われたような記憶が何となく残っているね。（老年層・男性　浦幌育ち）
・ごく普通に遊んでましたから。いたんだろうねぇ。きっとね。３軒か４軒くらいその辺にいたんだと思うんだけど、純粋なアイヌかといったらやっぱり、混血なんだろうね、きっとね。（老年層・男性　白糠育ち）

このような語り口は世代にかかわらず見られるものである。曖昧な語り口そのものが、住民とアイヌの人々との関わりの薄さと、アイヌの人々に対する彼らの無関心を端的に示しているといえるだろう。

第２項　学校生活における交流

次いで、学校の場面における交流に注目しよう。世代にかかわらず、学校時代の交流の記憶は自身が主人公の物語として語られる類のものであり、生活の場面におけるその記憶よりも具体的で鮮やかである。インタビューの結果をみると、どの世代においても、アイヌのクラスメートとは普通に付き合っていたという回答が多い。アイヌであることが積極的にカミングアウトされることはないが、周囲はその事実を知っていたというケースがほとんどである。

青年層からは、学校以外の生活の場面に関しては、アイヌの人々との関係についての具体的な思い出は聞かれないが、学校生活については、差別やいじめがあったわけではないこと、クラスメートとして他の友人と同じように付き合っていたことが挙げられている。アイヌの人々を異質な存在

としてつねに意識することがないというのは平和な情景ともいえるが、それは和人からみた情景である。和人側の無頓着さによって気づかれないことがあった可能性も含めてこれらの語りをとらえることが重要である。なかには、アイヌの血筋であることが明らかであるのに本人がそれを認めない場合、あえてその点には触れないといった配慮をしていたことを語る者もいるが、彼女はこの地域に生まれ育ち、幼い頃からアイヌの人々に対する差別があることを知っている者である。

・小学校の本当、低学年くらいまでかな。俺らの時は。もう３、４年生くらいになったら、そういうの気にしなくなったみたいで。だから差別的なっていうのはほとんどないですね、こっちの人は。こっちに来てアイヌっていうのを知って、何だろうみたいな感じ。アイヌっていう言葉自体知らなかったから。白糠に来るまで。とくに何かしてるっていうわけじゃないんですよ。あいつはアイヌだよっていうくらい。だからって何かしているわけじゃない。いじめがあるわけじゃない。みんなで仲良くやってたんじゃないかな。（青年層・男性　白糠育ち）
・そういう差別とかそういうのは全然なく、ふつうに友達っていうか、もう、同じ小学生です。（青年層・女性　白糠育ち）
・「僕は違うよ」みたいな。自分の同じ歳の中にいる子は、そういう感じです。まあ、本当に見てわかる子は、あえては自分では言わないですけど。うん、正直、触れちゃいけないのかなっていう面もあります。だからあえて聞いてないっていうのもあって。世間体、差別、だったりそういうのもあるのかな。あんまり深く言ったら本人に悪いかなっていう感じ。（青年層・女性　白糠育ち）

このように､青年層ではアイヌの血筋を理由とする差別があったという話は聞かれない。しかし、壮年層・老年層では、差別なく付き合っていたという者と、差別的な行動をした・クラス内の差別に巻き込まれた者との両方がおり、アイヌの人々に対する感情はもう少し複雑である。

まず、差別なく付き合っていたというのは、異質な存在であると意識しながらも、それを前提として普段どおりの交流が行われていたというものである。

・もともと白糠の子たちは、やっぱり、そういうアイヌっていう人の部分では、差別じゃないんだろうけど、一部違う見方はしてた子もいたから。そういうの聞いて意識したっていうのはあるけど。でももちろん、友だちにもアイヌの人はいたし。…だから変な話、あの人アイヌなんだよっていうような言葉も聞いたことあるから。そういうので､あっそうなんだっていう位の意識かな。（壮年層・男性　白糠育ち）
・小学生の時は、私の同級生に○○とかという、名前を忘れたな、男の子がいたんですよ。その子は、みんなアイヌだと知っていたのですけど、全然差別しないで仲良く、私たちグループで一緒に遊んでいましたね。知っていたと思いますよ。みんなわかっていたけど、そんなばかにするような子じゃないし、すごくいい子だったんですよ。優しくて、いい子で、みんな本当に仲良くしていましたね。（学校の中の差別は）なかったですね。私たちの年代というか、クラスの中ではそういうことは一切なかったですね。（壮年層・女性　羅臼育ち）
・男の子も女の子もいたんだ。で、女の子とはクラスが違うんだけど、帰るのがちょうど中間ぐら

いまで一緒だから、学校帰りがね、だから一緒に帰って何のあれもなかったんだけど、やっぱり周りの友だちが、ええ、何で、あの人のお母さんアイヌだよみたいに言われたのね、でも中学生の時は、アイヌで何が悪いのって、私はあの人のお母さんと、はっきり言って、もう顔にね、出てるから、別にどってことなく私は付き合ってたんだけど、友だちにやっぱりそやって言われて、アイヌだよって。（老年層・女性　帯広育ち）

・居たんだろうか？今から考えればね、風貌から判断できる子もいるけれど、風貌だけじゃ判断しきれない人もいますからね。う〜ん、アイヌね。あんまりはっきり覚えてないですね。（老年層・男性　鶴居／釧路育ち）

他方、差別が語られる際には２通りのストーリーがある。１つは、差別が子どもたちのなかから自然発生的に生まれたことを振り返るものであり、もう１つは、クラスのなかに教師が差別を持ち込み、そこに巻き込まれた経験を語るものである。後者においては、教師の差別的な態度についての批判的な言葉も聞かれる。

・しゃべる時はしゃべるし、別に。ただ、自分の友だちでは、友だちというか、一緒に動くグループではなかったので。偏見かもしれないけど、なんか隠してるような気がする。その人たちのそういう文化的なものとか。外には出さないで、きてたような気がする、その人たちは。（壮年層・女性　帯広育ち）

・ごく普通に関わってたと思うけど、中にはやっぱり「いじめ」というかね、やっぱり。顔が違うと言ったらおかしいけども、ある程度蔑んでるようなところはそのように接する人はいたよね。やっぱり食事というか昼休みの時とか、こんなことを言ったら失礼だけど、若干匂いが違うんだろうけれども、そのような感じで、子どもだからね、指を指したり、こづいたりはしていたんではないかという気はするね。（老年層・男性　白糠育ち）

・私の記憶では、どちらかと言うと、避けていたというかね。そういう、戦争中でしたのでね、アイヌの人っていうのは、おそらく差別されていたと思うんです。だから、私たちも物資がないなりに上靴とか履いていたけど、彼女はいつも裸足で。だから、どちらかというと、自分ではその人と仲良くしようっていう気持ちにはなれなかったっていうかね。（老年層・女性　静内育ち）

・中学校になった時に、小学校がたくさんあったから中学校になった時に、アイヌ系の女の子が来たというのがあった。でもそんな差別というのはなかった。ただ、小学校４年生の時に、担任の先生がアイヌのことを、これは侮蔑だなぁ。笑わすんだよね。「アイヌの屁臭いな。１里行っても臭い。２里行っても臭い。３里行って、鼻の頭を見たら糞（くそ）がついていた」と、そういう話をするんだ。ただ大人の人が差別だね。「あの、メノコどうしている？」とかいう、その「メノコ」というのが何なのかわからなかった。それはあったね。いじめとか差別というのは親が言うから、大人が言うから子どもが受け継ぐのさ。うん、でもいじめたとかないなぁ。（老年層・男性　十勝清水育ち）

・小学校の同級生いた時も何か先生の教台っていうのかな、あそこに座らされて、なして座らされたのか今でも覚えてないんだけどね。あの時の先生もある程度何かばかにしてたんだろうね、あんなことしてね。小学校１年生、２年生、みんなの目の前に教台の上に座らせて、何かその子が

悪いことしたのかとかまったく記憶がないんだけど。アイヌの人だけ。だから昭和36年ぐらいの話なんで、学校の先生らなおさらそういう風潮があったんでないですかね。あの頃学校の先生ったら「ははぁ」っていうぐらい偉かったから。（老年層・男性　阿寒町育ち）

・小学校の時は、それで、その隣のクラスの子っていうのは、何したかクラス違うからわかんないだけど、廊下に机と椅子出されて、お前はここで勉強しないさいみたいな教室に入る資格ないみたいな。それで、黙って座ってるしかなくて、そやって座ってるっていうのを見て、えって、なんていう先生なんだろうって私小学校の時から、でも小学校だから、先生にたてつくっていうことは知らなかったし。私はそんなひやかしとかって、友だちみたいにこうこうみたいじゃなくって、ええ、この人の親が見た時にすごい悲しい思いするのはこのお母さんだろうなっていうのがつねにあった。（老年層・女性　帯広育ち）

このように見てくると、子ども同士の関係においては概ねアイヌの血筋にこだわることなく交流が行われており、そこに若干の違和感がもたれることがあったとしても、ただちにそれが激しい差別につながることはなかったというのが共通するところである。生活の場面におけるアイヌの人々との関わりの薄さと無関心、それに由来する無知とある種の鈍感さとが、差別に至るほどの強い感情を持つことを阻んだと考えることもできる。また、幸運にも授業のなかでアイヌについて学ぶことができた者は、「知ること」によって差別的な態度をとらずにすんでいる。「その人の授業だと社会科の時間に教科書から離れるんだけど、それがすごく楽しくて面白かったと記憶にあるんですよ。身近にアイヌの友だちがいるんだけど、「この人たちって一体何？」って考えたこともなかった。でもきっと彼らの中には、俺らのじいさん、ばあさん、ひいじいさんの方が白糠はずっと古いんだぞ、ときっとどこかにあったんだろうと思うんですよね。」（老年層・男性）という言葉が示すとおりである。

しかしながら、老年層のなかには、教師がその権威によって差別をおこなったという苦々しい記憶を持つ者もいる。新ひだか調査においては、アイヌの子どもに対する教師の特別の配慮や、アイヌのクラスメートに対するクラス内の支援もひとつの思い出としてあげられていたが、それとは対照的な内容である。それが年月を経てここまで詳細に語られるということから、それだけ子どもにとっては印象的な出来事だったことがうかがわれる。

第３項　仕事における交流

続いて、仕事の場面における交流に目を移そう。これについて語っているのは壮年層と老年層である。仕事の内容は、役場、漁業、土木関係、給食調理、教員などであり、漁業従事者を除いては、現在はその職を退いており、アイヌの人々との関わりは過去の一時期のエピソードとして語られる。この一時期の交流から個人的な親しい交流に進んだと語る者はいない。なかでも、元・役場職員と元・教員の場合は、職務上、アイヌ差別に対処しなければならない立場にあったという意味で、その記憶は、懐かしい思い出であると同時に、それなりに重い経験として受けとめられている。元・役場職員は、ウタリ福祉の担当者として取り組む一方で、アイヌの人々から「逆差別だ」と罵声を浴びせられた苦い経験（アイヌの人々のための施策を行うことを、アイヌを「異民族」として特別視することであるとして、これもまた差別だと責める人もいた…著者注）をあげ、また、元・教員

は、クラス運営や保護者との関係の難しさを振り返る。

・【役場】役場の中の職場で広報の仕事に配置になった時に、こういう行事だとかに取材に行くようになったのと。それと、役場の中に親しく付き合ってる人が、アイヌの人たちとの関わりがすごい人が居るんですよ。その人の関係で、それからお付き合いするようになったって言うような。（役場で仕事始めてからの付き合いは）まあ、それ以前もあったけど、それこそまあ、普通に一緒に飲んだり食べたり。（壮年層・男性）
・【役場】差別だ、逆差別さ。と罵声を浴びせられたり、嫌な思いをして帰ってきて、当たる所がないから家の中で暴れたりしたこともある。そうそう。アイヌの人に差別されるんです。「バカにしてるんでしょ？基本的に私たちをバカにしてるでしょ？だらしない、お金を借りても返さない、約束を守らない、時間を守らないって思ってるでしょ？」って。「そんなことは思ってないよって」。それを言われたのが、ちょっと有名な人でさ。だけど、普通の人が会えない人たちにも会えたから、いい経験をさせてもらったよ。（老年層・男性）
・【土木】（仕事の現場には）いました。１人だけ。ちょうど白糠の人だったんですよね。ですから亡くなった時は葬儀にも行きましたけども。普段付き合ってる、仕事上の付き合いだけですから、普段から付き合って何かしてるという感じではないですよね。仕事上の関係だけですね。（老年層・男性）
・【学校給食】私もししゃものお祭りだとか何か、そういうのにちょっと参加っちゅうか学校給食の方に携わってたもんですから、給食の方でお昼を子どもたちと、学校とそのアイヌの人たちとの交流っていうのかな、そういうので豚汁か石狩汁か何か作るのにその河原に、作るのは給食センターで作ったんですけども、その河原に持ってって、行事をやった後にみんなで食事をするっちゅうことで、そういうのには参加したことはあるんですよね。（老年層・女性）
・【教員】その頃ね、子どもたちもね、一番困るのは座席替えさ。子どもたちに「座席替えしてくれ」って言うでしょ。替える時ね、アイヌの子と一緒にさせるとね。だって昔は、両袖の机だから。ひとつひとつでないから。どうしても、座席替えしたら、ふたり組になっちゃうわけさ。そうするとね、その頃のアイヌの人たちね、体臭がまだあるわけさ。それからもうひとつはね、その頃は、不潔な生活。低レベルな生活だったから、それで、においがするからいやだって。それから、肌の色が違う。そういうので、子どもたちがいやがったね。（老年層・男性）
・【教員】普通にやっていたから、あんまり感じなかったね。注意して見れば、アイヌ民族だなってことはわかるしね。子どもたちも、そういうのはとくに、アイヌ民族だからどうのっていう、そういう指導はしなかったからね。みんな、仲良くするよっていう、そういう方針でやっていたからね。…（お父さんが和人で、お母さんがアイヌの子を受け持った時、そのお母さんに）「子どもたちにね、よくばかにされたんだよな。先生も、ばかにしたんでないか」って、言われたことがあるの。（老年層・男性）

これに対して、家業としての漁業に従事する者は、これまで長年にわたって（現在もなお）、仕事仲間として家族ぐるみで付き合っているアイヌの人々について述べており、そこに浮かび上がる交流関係は、より私的で、より親密である。時間の積み重ねを経て、アイヌの人々との関係は堅固

な絆として認識されている。

・【漁業】毎年、もう十何年かな、あの子が小学校１年の時にはもういたんだから、もう 20 年間近く。20 年じゃないね、14 ～ 15 年はずっと来てもらってる人なんですよ。もう親戚みたいな感じで。（壮年層・女性）
・【漁業】うちらは漁師だから、船頭さんから、もう主要な人方みんなそっち系統の人なんです。だから、特別、一緒の生活、ご飯炊きさんもみんなそう、その家族とかで。だから、でも一応言われたのは「うちはそういう人たちと一緒に仕事してるんだから、アイヌとかっていう言葉は使っちゃいけないよ」っては、ここに来た時に言われてたのね。それでも、特別、苦にもしないで一緒に仕事を、うん、うちは魚取ってくれる人は何であろうが、いい人なんだからっていう感じでやってるから。（老年層・女性）

以上、仕事における交流を見てきた。その交流の多くは過去の一時期のものであり、交流が続いているケースは少数派である。しかし、学校生活と同じように、仕事に関わる場面がアイヌの人々との交流のきっかけを提供してきたことはたしかだといえる。

第２節　現在の生活における交流

本節では、アンケート調査のデータをもとに、インタビューデータも活用しながら、現在の生活において住民がアイヌの人々とどのような交流を持っているのかを明らかにする。その際、「ジェンダー」「地域への根づき方」「地域における諸活動」「職業生活」「アイヌ文化への関心」という５つの視点から、交流の多寡と内容について検討する。

はじめに、アイヌの人々との交流状況の全体像を把握しておこう。表８－１は交流頻度をまとめたものである。それによると、交流が「よくある」が 11.4％、「たまにある」が 22.3％であり、交流が「ある」（「よくある」「たまにある」の合計、以下同じ）は 33.7％となる。「交流あり」33.7％というこの数値は、数値だけをみれば、新ひだかの「交流あり」55.7％、伊達の「交流あり」14.4％の中間に位置する。アイヌ系住民に限ると、交流が「ある」は 50％に上り、和人と比べて交流が盛んであることは明らかである。

表８－１　アイヌの人々との交流頻度　（アイヌ性別・世代別）

	度数（年齢層毎の応答者数の％）				合計
	よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	2　(4.1)	3　(6.1)	8　(16.3)	36　(73.5)	49　(100.0)
和人壮年層	18　(13.7)	33　(25.2)	29　(22.1)	51　(38.9)	131　(100.0)
和人老年層	25　(11.1)	55　(24.3)	62　(27.4)	84　(37.2)	226　(100.0)
和人　計	45　(11.1)	91　(22.4)	99　(24.4)	171　(42.1)	406　(100.0)
アイヌ系住民	2　(33.3)	1　(16.7)	2　(33.3)	1　(16.7)	6　(100.0)
合計	47　(11.4)	92　(22.3)	101　(24.5)	172　(41.7)	412　(100.0)

表８－２　アイヌの人々との交流の内容（複数回答）（アイヌ性別・世代別）

	度数（年齢層毎の応答者数の％）						合計
	近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代	その他	
和人青年層	2（25.0）	2（25.0）	0（0.0）	0（0.0）	3（37.5）	3（37.5）	8（4.8）
和人壮年層	18（31.0）	26（44.8）	7（12.1）	14（24.1）	16（27.6）	5（8.6）	58（35.2）
和人老年層	38（38.4）	25（25.3）	25（25.3）	5（5.1）	18（18.2）	20（20.2）	99（60.0）
和人　計	58（35.2）	53（32.1）	32（19.4）	19（11.5）	37（22.4）	28（17.0）	165（100.0）
アイヌ系住民計	2（66.7）	1（33.3）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	1（33.3）	3（100.0）

注）インターネットは回答者ゼロなので欄を削除

さて、この交流頻度を世代毎に見ると、交流が「ある」は、青年層 10.2％、壮年層 38.9％、老年層 35.4％であり、青年層における交流が他２世代に比較してとくに低調であることがわかる。このように３世代を比較した時、青年層において交流が最も少ない点は新ひだかや伊達と同様である。しかし、新ひだか・伊達の両地域においては、青年層から老年層へと世代が上がるにつれて「交流あり」の比率が高くなっていくのに対して、白糠の場合は、老年層（35.4％）よりも壮年層（38.9％）において「交流あり」の比率が若干高くなっているところに違いが見られる。壮年層と老年層に大きな差がないとはいえ、壮年層における交流頻度が３世代中最も高い点に白糠の特徴があるといえる。

では、そこにおいて展開される交流の内容とはどのようなものなのだろうか。交流が「ある」と回答した者にその内容を問うた結果をまとめたものが表８－２である。和人においては、数値の高い順に、「近所付き合い」35.2％、「職場付き合い」32.1％、「学生時代からの付き合い」22.4％、「趣味の付き合い」19.4％、「その他」17.0％、「子どもを介した付き合い」11.5％となる。選好的な交流よりも、家庭生活や職業生活に関わっての交流の方が多く選択されていることがわかる。アイヌ系住民の場合は、「近所付き合い」66.7％、「職場付き合い」33.3％、「その他」33.3％である。「その他」の内容については「夫がアイヌ民族」と回答されていることから、家族・親族としてのつながりによる交流ということになる。

これを世代毎に見ると、青年層では、「学生時代からの付き合い」「その他」が同率 37.5％、「近所付き合い」「職場付き合い」も同率 25.0％となっている。全体的な傾向とは逆に、選好的に継続される交流、偶然の出会いのような交流が主である。上の世代と比べれば、学業を終えてからの年月が短いことから、職場より学生時代の付き合いの方が多いとの説明ができるだろう。ここで、「学生時代からの付き合い」と並ぶ「その他」の付き合いの内容を確認すると、「アイヌポコロモシリの会館でのライブ」「友人の友人」「どの人かわからない」という記述がある。ライブのような一回性のイベントや、友人を介した遠いつながりは、日常的・継続的な交流とは言い難いものであり、さらに、「どの人かわからない」という言葉は、アイヌの人々に対するそもそもの関心の低さを示すものといえよう。

一方、壮年層の交流は、青年層とは異なり、仕事絡みのものが中心となる。交流内容を数値の高い順に並べると、「職場付き合い」44.8％、「近所付き合い」31.0％、「学生時代からの付き合い」27.6％、「子どもを介した付き合い」24.1％、「趣味の付き合い」12.1％、「その他」8.6％となる。働き盛りの年代であることから仕事関連での付き合いの比率が高くなるが、一方で、学生時代の付き

合いも維持されている。また、家庭を持ち子どもを育てるようになれば、近隣の人々や、子どもの学校や習い事等を通して知り合った人々との交流も増えていくと考えられる。

これに対して、老年層における交流では、青年層とも壮年層とも異なり、その主な舞台は地域社会となる。「近所付き合い」38.4%、「職場付き合い」と「趣味の付き合い」が同率の25.3%、「その他」20.2%、「学生時代からの付き合い」18.2%、「子どもを介した付き合い」5.1%の順となっている。この年代は定年退職を迎える年代である。したがって、仕事関連の交流より、地域住民としての近隣との付き合いや個人的交友としての趣味の付き合いの比率が高まることは当然といえる。ただし、仕事を続けている場合もあるため、壮年層より少ないとはいえ、職場での付き合いも行われている。同様に、学生時代からの付き合いも年月を経て縮小されつつ一定程度は継続されている。それに対して、子どもに関わる付き合いは子の成長とともに急激に減少している。

このように、アイヌの人々との交流のあり方は世代によって異なっている。これを新ひだかや伊達の住民と比べると、「交流あり」の数値には高低があるものの、壮年層では職場での付き合いが中心となること、老年層では近所付き合いの比重が高まること、この２点に関しては、両地域と同じ傾向が見出されている。

第１項　ジェンダー

それでは、先に掲げた５つの視点のうち、ジェンダーという視点から交流状況を見ていこう。表８－３から、交流が「ある」と回答する者の比率を世代毎にならべると、青年層では、男性9.6%、女性11.1%、壮年層では、男性36.7%、女性40.9%、老年層では、男性43.1%、女性27.6%となる。青年層と壮年層においては女性の交流頻度の方が高く、老年層においては男性の交流頻度の方が高いという結果である。考えられるひとつの理由としては、青年層、とくに壮年層においては、一般に、男性は仕事に忙しく、仕事以外のさまざまな付き合いを持つ余裕がもてないことがあげられよう。老年層は退職世代であるため、男性に時間的余裕が生まれ、交流の場面にも登場するようになると考えられる。

では、男性と女性では、交流の内容は異なるのだろうか。表８－４を見ると、とくに壮年層において、女性の「交流あり」の比率が男性より高い項目が多いことがわかる。たとえば、「近所付き合い」は、男性8.3%、女性17.8%、「職場付き合い」は、男性16.7%、女性21.9%、「子どもを介した付き合い」は、男性8.3%、女性12.3%、「学生時代からの付き合い」は、男性11.7%、女性12.3%である。共働きの家庭が増えたとはいえ、家事・育児の主担者が女性である場合はまだ多いと考えられる。よって、夫が働きざかり、子どもが育ちざかりである壮年層においては、ハウスキーピングの一環として妻による多様な交流がおこなわれ、そのなかで、アイヌの人々との交流もまた妻によって担われているのではないだろうか。一方、老年層男性は、退職後に地域社会に戻り、職場以外の付き合いを拡げる。そのなかで、アイヌの人々との「近所付き合い」「職場付き合い」「趣味の付き合い」「学生時代からの付き合い」がそれまで以上に盛んになり、交流が「ある」と回答する者の比率が女性より高くなるものと考えられる。男性と女性が職場や家庭に占める立場の違いが、交流のありように映し出されているといえるだろう。

表８－３　アイヌの人々との交流×ジェンダー　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	合計
和人青年層	男性	1　(4.8)	1　(4.8)	5　(23.5)	14　(66.7)	21 (100.0)
	女性	1　(3.7)	2　(7.4)	3　(11.1)	21　(77.8)	27 (100.0)
和人壮年層	男性	9　(15.0)	13　(21.7)	13　(21.7)	25　(41.7)	60 (100.0)
	女性	9　(12.7)	20　(28.2)	16　(22.5)	26　(36.6)	71 (100.0)
和人老年層	男性	16　(14.7)	31　(28.4)	27　(24.8)	35　(32.1)	109 (100.0)
	女性	9　(7.8)	23　(19.8)	35　(30.2)	49　(42.2)	116 (100.0)
和人　計		45　(11.1)	90　(22.3)	99　(24.5)	170　(42.1)	404 (100.0)
アイヌ系住民	男性	1　(33.3)	0　(0.0)	1　(33.3)	1　(33.3)	3 (100.0)
	女性	1　(33.3)	1　(33.3)	1　(33.3)	0　(0.0)	3 (100.0)
合計		47　(11.5)	91　(22.2)	101　(24.6)	171　(41.7)	410 (100.0)

表８－４　アイヌの人々との交流内容×ジェンダー　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	合計
和人青年層	男性	1　(4.5)	1　(4.5)	0　(0.0)	0　(0.0)	2　(9.1)	0　(0.0)	22 (100.0)
	女性	1　(3.6)	1　(3.6)	0　(0.0)	0　(0.0)	1　(3.6)	3　(10.7)	28 (100.0)
和人壮年層	男性	5　(8.3)	10　(16.7)	4　(6.7)	5　(8.3)	7　(11.7)	4　(6.7)	60 (100.0)
	女性	13　(17.8)	16　(21.9)	3　(4.1)	9　(12.3)	9　(12.3)	1　(1.4)	73 (100.0)
和人老年層	男性	20　(18.0)	15　(13.5)	15　(13.5)	2　(1.8)	15　(13.5)	8　(7.2)	111 (100.0)
	女性	18　(14.9)	10　(8.3)	9　(7.4)	3　(2.5)	3　(2.5)	12　(9.9)	121 (100.0)
和人　計		58　(14.0)	53　(12.8)	31　(7.5)	19　(4.6)	37　(8.9)	28　(6.7)	415 (100.0)
アイヌ系住民	男性	2　(66.7)	1　(33.3)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	3 (100.0)
	女性	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	1　(33.3)	3 (100.0)
合計		60　(14.3)	54　(12.9)	31　(7.4)	19　(4.5)	37　(8.8)	29　(6.9)	421 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

第２項　地域への根づき方

次に、この交流状況を地域への根づき方という視点から考察する。地域への根づき方の指標として、本人の来住時期、居住地区、定住志向の３つに注目する。なぜなら、アイヌの人々との地理的な近さはより多くの交流をもたらし得ると考えられ、その地理的に近い環境に身を置いた時間的な長さ、そのような環境を含めての土地への愛着の強さもまた、交流の多寡や内容を左右すると考えられるからである。上記３つについて順に交流頻度と交流内容を見ていこう。

表８－５は、本人来住時期、すなわち、地元生まれ・育ちの有無について交流頻度をまとめたものである。それによると、全体の傾向としては、地元に生まれ育った者において、アイヌの人々との交流頻度がより高いという結果となる。世代毎に交流が「ある」比率を見ると、青年層では「生まれてからずっと」12%、「明治～平成に来住」8.4%、壮年層では「生まれてからずっと」41.1%、「明治～平成に来住」37.3%、老年層では「生まれてからずっと」36.1%、「明治～平成に来住」34.8%となる。アイヌ系住民については、交流が「ある」比率こそ来住時期にかかわらず同じであるが、詳細に見ると、「生まれてからずっと」居住する者において、交流が「よくある」と回答する者がより多く、交流が「ほとんどない」と回答する者がより少ないことから、地元生まれ・育ちの効果を認めることができる。そこで、地元生まれ・育ちであることが交流内容にどのような影響を与え

ているのかを見てみよう。

表８－６によれば、地元に生まれ育った者がそうではない者に比べて明らかに多くの交流をしているのは、「学生時代からの付き合い」のみである。これについて見ると、青年層では「生まれてからずっと」12.0％、「明治～平成に来住」0.0％、壮年層では「生まれてからずっと」19.3％、「明治～平成に来住」6.6％、老年層では「生まれてからずっと」14.0％、「明治～平成に来住」3.4％である。地元の小・中学校時代に始まる親しいつながりは、地元に生まれ、暮らし続けてこそ維持されるということである。その他の項目については、地元生まれ･育ちによる違いは見受けられない。ただし、アイヌ系住民の場合は、地元生まれ・育ちである者において、「近所付き合い」「職場付き合い」をしていると回答する者が多いという結果である。

表８－５　アイヌの人々との交流×来住時期　（アイヌ性別・世代別）

		度数（％）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	生まれてからずっと	1　(4.0)	2　(8.0)	4　(16.0)	18　(72.0)	25 (100.0)
	明治～平成に来住	1　(4.2)	1　(4.2)	4　(16.7)	18　(75.0)	24 (100.0)
和人壮年層	生まれてからずっと	9　(16.1)	14　(25.0)	17　(30.4)	16　(28.6)	56 (100.0)
	明治～平成に来住	9　(12.0)	19　(25.3)	12　(16.0)	35　(46.7)	75 (100.0)
和人老年層	生まれてからずっと	8　(9.6)	22　(26.5)	27　(32.5)	26　(31.3)	83 (100.0)
	明治～平成に来住	17　(12.1)	32　(22.7)	34　(24.1)	58　(41.1)	141 (100.0)
和人　計		45　(11.1)	90　(22.3)	98　(24.3)	171　(42.3)	404 (100.0)
アイヌ系住民	生まれてからずっと	1　(50.0)	0　(0.0)	1　(50.0)	0　(0.0)	2 (100.0)
	明治～平成に来住	1　(25.0)	1　(25.0)	1　(25.0)	1　(25.0)	4 (100.0)
合計		47　(11.5)	91　(22.2)	100　(24.4)	172　(42.0)	410 (100.0)

表８－６　アイヌの人々との交流内容×来住時期　（アイヌ性別・世代別）

		度数（％）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	誕生以来	1　(4.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	3 (12.0)	0　(0.0)	25 (100.0)
	明治～平成	1　(3.8)	2　(7.7)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	3 (11.5)	26 (100.0)
和人壮年層	誕生以来	10　(17.5)	12 (21.1)	3　(5.3)	7 (12.3)	11 (19.3)	2　(3.5)	57 (100.0)
	明治～平成	8　(10.5)	14 (18.4)	4　(5.3)	7　(9.2)	5　(6.6)	3　(3.9)	76 (100.0)
和人老年層	誕生以来	7　(8.1)	8　(9.3)	7　(8.1)	1　(1.2)	12 (14.0)	6　(7.0)	86 (100.0)
	明治～平成	29　(20.0)	17 (11.7)	17 (11.7)	4　(2.8)	5　(3.4)	14　(9.7)	145 (100.0)
和人　計		56　(13.5)	53 (12.8)	31　(7.5)	19　(4.6)	36　(8.7)	28　(6.7)	415 (100.0)
アイヌ系住民	誕生以来	2 (100.0)	1 (50.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	2 (100.0)
	明治～平成	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
合計		58　(13.8)	54 (12.8)	31　(7.4)	19　(4.5)	36　(8.6)	29　(6.9)	421 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

次に、居住地区毎の交流頻度を見る（表８－７）。３地区のうち白糠地区において、交流が「ある」の比率が最も高い。白糠地区以外の地区の順位は世代によって異なり、青年層では、「白糠地区」19.2％、「茶路地区」0.0％、「庶路地区」0.0％、壮年層では、「白糠地区」47.3％、「庶路地区」31.8％、「茶路地区」15.4％、老年層では、「白糠地区」41.6％、「茶路地区」30.0％、「庶路地区」27.2％の順となっている。これらの数値をみればわかるように、とくに壮年層と老年層において、白糠地区居住者の「交流あり」の比率が高い。アイヌの人々が集住する地区に居住することがより多くの交流を促すと考

えることができるが、それは交流頻度が相対的に高い中高年世代においてより顕著である。

では、交流の内容にも居住地区による違いがあるのだろうか。表８－８を見よう。「近所付き合い」と「学生時代からの付き合い」に限っては３世代すべてにおいて「白糠地区」の数値が高い。この２つ以外の交流についても、白糠居住の壮年層と老年層においては、他地区の当該世代よりも「交流あり」と回答する比率が高い傾向が認められる。ただし、「庶路地区」の数値の方が高い項目もあり、交流内容に関しては地区の特徴を析出することは難しい。

表８－７　アイヌの人々との交流×居住地区　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	白糠	2 (7.7)	3 (11.5)	2 (7.7)	19 (73.1)	26 (100.0)
	茶路	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100.0)
	庶路	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (15.8)	16 (84.2)	19 (100.0)
	不明	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
和人壮年層	白糠	11 (14.9)	24 (32.4)	15 (20.3)	24 (32.4)	74 (100.0)
	茶路	0 (0.0)	2 (15.4)	6 (46.2)	5 (38.5)	13 (100.0)
	庶路	7 (15.9)	7 (15.9)	8 (18.2)	22 (50.0)	44 (100.0)
和人老年層	白糠	19 (15.8)	31 (25.8)	33 (27.5)	37 (30.8)	120 (100.0)
	茶路	2 (20.0)	1 (10.0)	4 (40.0)	3 (30.0)	10 (100.0)
	庶路	2 (2.5)	20 (24.7)	20 (24.7)	39 (48.1)	81 (100.0)
	不明	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0.0)	3 (100.0)
和人　計		44 (11.2)	89 (22.6)	95 (24.1)	166 (42.1)	394 (100.0)
アイヌ系住民	白糠	1 (50.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	庶路	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0.0)	3 (100.0)
合計		46 (11.5)	90 (22.6)	97 (24.3)	166 (41.6)	399 (100.0)

表８－８　アイヌの人々との交流の内容×居住地区　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	白糠	2 (7.1)	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (10.7)	1 (3.6)	28 (100.0)
	茶路	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	庶路	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.3)	19 (100.0)
	不明	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	2 (100.0)
和人壮年層	白糠	13 (17.3)	15 (20.0)	4 (5.3)	11 (14.7)	13 (17.3)	3 (4.0)	75 (100.0)
	茶路	1 (7.7)	1 (7.7)	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	1 (7.7)	13 (100.0)
	庶路	4 (8.9)	10 (22.2)	3 (6.7)	2 (4.4)	3 (6.7)	1 (2.2)	45 (100.0)
和人老年層	白糠	25 (20.3)	13 (10.6)	18 (14.6)	5 (4.1)	13 (10.6)	13 (10.6)	123 (100.0)
	茶路	1 (8.3)	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	1 (8.3)	12 (100.0)
	庶路	8 (9.9)	10 (12.3)	6 (7.4)	0 (0.0)	4 (4.9)	4 (4.9)	81 (100.0)
	不明	2 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
和人　計		56 (13.9)	52 (12.9)	31 (7.7)	19 (4.7)	37 (9.2)	26 (6.5)	403 (100.0)
アイヌ系住民	白糠	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	庶路	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
合計		58 (14.2)	53 (13.0)	31 (7.6)	19 (4.7)	37 (9.1)	27 (6.6)	408 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

それでは、「ずっと住みたい」と回答する者において、交流が「ある」比率が高いといえるだろうか。定住志向によって交流頻度がどのように異なるのかを見ると、答えは否である（表８－９）。ただし、「ずっと住みたい」と「移る予定あり」を取り出して比べた場合は、「ずっと住みたい」者

において、交流が「ある」と回答する比率が確実に高いということは言える。すなわち、「交流あり」の比率を世代毎に見ると、青年層では、「ずっと住みたい」18.8%、「移る予定あり」0.0%、壮年層では、「ずっと住みたい」42.7%、「移る予定あり」0.0%、老年層では、「ずっと住みたい」41.4%、「移る予定あり」25.0%となっている。他所に移り住むことが決まっている状況というのは、アイヌの人々との交流を含め周囲との交友関係が縮小されていくプロセスといえるのかもしれない。

しかしながら、「移りたい」という回答の意味をどのように解釈すればよいのだろうか。移りたいと回答する者における「交流あり」は、定住志向を持つ者よりも低調であるとは限らず（壮年層）、逆に、他所へ移る具体的な予定がある者よりも多いとも限らない（老年層）。これは、アイヌ系住民に関しても同じで、交流が「ある」のは、「ずっと住みたい」と回答する者において33.3%、「移りたい」と回答する者50%である。また、「わからない」と回答する者については、「ずっと住みたい」と回答する者に比べるなら「交流あり」の比率は低いが、「移りたい」「移る予定あり」の者と交流の頻度に関してどのように異なるのかをとらえることは難しい。したがって、これらのことから言えるのは、「ずっと住みたい」と思うことが交流の多さにつながる可能性があるという点にとどまる。

表８－９　アイヌの人々との交流×定住志向　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	ずっと住みたい	2（12.5）	1（6.3）	3（18.8）	10（62.5）	16（100.0）
	移りたい	0（0.0）	2（11.8）	2（11.8）	13（76.5）	17（100.0）
	移る予定あり	0（0.0）	0（0.0）	2（28.6）	5（71.4）	7（100.0）
	わからない	0（0.0）	0（0.0）	1（14.3）	6（85.7）	7（100.0）
和人壮年層	ずっと住みたい	12（16.0）	20（26.7）	19（25.3）	24（32.0）	75（100.0）
	移りたい	3（11.5）	9（34.6）	4（15.4）	10（38.5）	26（100.0）
	移る予定あり	0（0.0）	0（0.0）	1（25.0）	3（75.0）	4（100.0）
	わからない	1（4.3）	4（17.4）	5（21.7）	13（56.5）	23（100.0）
和人老年層	ずっと住みたい	19（12.1）	46（29.3）	44（28.0）	48（30.6）	157（100.0）
	移りたい	3（15.0）	1（5.0）	8（40.0）	8（40.0）	20（100.0）
	移る予定あり	0（0.0）	1（25.0）	2（50.0）	1（25.0）	4（100.0）
	わからない	0（0.0）	5（21.7）	3（13.0）	15（65.2）	23（100.0）
和人　計		40（10.6）	89（23.5）	94（24.8）	156（41.2）	379（100.0）
アイヌ系住民	ずっと住みたい	1（33.3）	0（0.0）	1（33.3）	1（33.3）	3（100.0）
	移りたい	1（50.0）	0（0.0）	1（50.0）	0（0.0）	2（100.0）
合計		42（10.9）	89（23.2）	96（25.0）	157（40.9）	384（100.0）

さて、定住志向と交流頻度についてのこうした状況をふまえて、交流内容を見るとどうだろうか（表８－10）。上に倣って定住志向がある者と移る予定がある者とを見比べるならば、定住志向を持つ者においては、どの項目についても、よりコンスタントに交流がおこなわれていることがわかる。しかし、「移りたい」と回答する者においても、定住志向を持つ者と同様に様々な交流が行われており、交流の種類によっては、定住志向を持つ者よりも「交流あり」の比率が高い。たとえば、壮年層における「近所付き合い」は、「ずっと住みたい」11.8%、「移りたい」23.1%であり、また、「職場付き合い」も、「ずっと住みたい」18.4%、「移りたい」23.1%となっている。アイヌ系住民についても同じことがあてはまる。このことから、どのような内容の交流が行われるのかは定住志向に枠づけされるものではないと考えることができる。

表８－10　アイヌの人々との交流の内容×定住志向　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	ずっと	2 (12.5)	1 (6.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (6.3)	2 (12.5)	16 (100.0)
	移りたい	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (11.8)	0 (0.0)	17 (100.0)
	移る予定	0 (0.0)	1 (12.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (12.5)	8 (100.0)
	わからない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (100.0)
和人壮年層	ずっと	9 (11.8)	14 (18.4)	5 (6.6)	12 (15.8)	10 (13.2)	5 (6.6)	76 (100.0)
	移りたい	6 (23.1)	6 (23.1)	1 (3.8)	2 (7.7)	3 (11.5)	0 (0.0)	26 (100.0)
	移る予定	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	わからない	3 (13.0)	5 (21.7)	1 (4.3)	0 (0.0)	2 (8.7)	0 (0.0)	23 (100.0)
和人老年層	ずっと	31 (19.4)	19 (11.9)	17 (10.6)	3 (1.9)	15 (9.4)	17 (10.6)	160 (100.0)
	移りたい	3 (15.0)	2 (10.0)	3 (15.0)	2 (10.0)	2 (10.0)	1 (5.0)	20 (100.0)
	移る予定	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	わからない	1 (4.3)	3 (13.0)	1 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.3)	23 (100.0)
和人　計		55 (14.3)	51 (13.3)	28 (7.3)	19 (4.9)	36 (9.4)	27 (7.0)	384 (100.0)
アイヌ系住民	ずっと	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
	移りたい	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
合計		57 (14.7)	52 (13.4)	28 (7.2)	19 (4.9)	36 (9.3)	28 (7.2)	389 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

第３項　地域における諸活動

続けて、アイヌの人々との交流状況を地域における諸活動という視点から見ていこう。地域の諸活動として、近所付き合い、自治会活動の２つに注目する。というのも、日常的に近隣との付き合いが盛んに行われていれば、アイヌの人々との交流もその一環として盛んに行われることが予想され、また、地域の自治会活動への参加は、地域住民としてのアイヌの人々と知り合う機会増、交流増につながる可能性があると考えられるからである。この２つについて交流頻度と交流内容を検討する。

まず、近所付き合いの有無・程度の別に交流頻度を整理した表８－11を見る。青年層では「道で会えば挨拶をかわす程度」の付き合いの者が最多で７割を超え、「近所付き合いはない」を加えると８割を超えるほどの低調ぶりであるため、ここでは、壮年層と老年層に焦点を当てることにする。世代毎に、交流が「ある」の数値を高い順に並べると、壮年層では「近所付き合いはない」66.7％、「会った際に世間話をする」54.5％、「道で会えば挨拶をかわす程度」23.8％、「互いの家を行き来する」20.0％、老年層では、「互いの家を行き来する」53.5％、「会った際に世間話をする」37.7％、「近所付き合いはない」33.4％、「道で会えば挨拶をかわす程度」25.3％となる。この並びは、近所付き合いの深さの順にはなっていない。したがって、より密な近所付き合いがあるところに、アイヌの人々とのより濃い交流があるとは必ずしもいえないことがわかる。唯一老年層においては、近所付き合いが深まるほど、交流が「ほとんどない」の数値が低下していくことから、近所付き合いを積極的にすることがアイヌの人々とより多くの交流がなされることにつながることが示唆されよう。アイヌ系住民については「互いの家を行き来する」付き合いをしている者はいないが、それを除くと、より深い近所付き合いをしているほど交流の頻度も高まっているという結果である。

では、この時、近所付き合いの程度によって交流の内容は異なるのだろうか（表８－12）。それ

ぞれの交流について、「交流あり」の数値を近所付き合いの深さ別に確認すると、和人についてもアイヌ系住民についても、交流の種類によってばらばらであることがわかる。というのも、近所付き合いとは、一般に、自治会活動とは異なり、自らそこに参加する意思表明をして参加する類のものではないからである。日常生活のなかでたまたま人と行き会って成り立ち、深まっていく類の付き合いといえる。以下は、近所付き合いとアイヌの人々との出会い・交流についての語りである。いずれも意図的ではなく偶然に始まった交流として語られている。

・だんだん認められるっていうか、普通にしていると普通の生活さ。俺らもそう、みんなこうね。それを町内だって、そこのそば屋さんだってそうなんだけどね。うちの隣も、少しかかっているんだけどね（「アイヌの血筋なんだけどね」の意と思われる…著者注）。普通に付き合っている上では別にね。それでもまだ嫌う人は嫌うようだけどね。（老年層・男性）
・近所っちゅうか、そこの国道ありますよね。国道から向こうなんですけども、ちょっと飲み友だちっていうんですか、たまたま私の行く店にご夫婦で来る人も、２人ともそうなんですよね。だから、私たちは何にも違和感がなくお付き合いはしてるんですけども。…自分でここに嫁いで、あっちこっちで働いたり、そういう出会いがあったりして、お付き合いしてみれば、何も…今の人たち、昔の年いった人たちは、頑として、俺はアイヌだ、みたいなとこあったみたいだけど、今の若い人たちは、そういうの全然ない、私たちと同じ気持ちっていうか、そんな…自分たちは、そういう偏見を持ってないっていうか、我々と同じく考えてるんでないだろうかと思うぐらい、みんな仲よく、私のこの辺の知ってる人たちはお付き合いはしてるみたいですけど。（老年層・女性）

表８－11　アイヌの人々との交流×近所付き合い　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	近所付き合いはない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)	4 (100.0)
	道で会えば挨拶	1 (2.8)	3 (8.3)	7 (19.4)	25 (69.4)	36 (100.0)
	会った際に世間話	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)	6 (100.0)
	互いの家を行き来	1 (33.3)	0 (0.0)	1 (33.3)	1 (33.3)	3 (100.0)
和人壮年層	近所付き合いはない	3 (50.0)	1 (16.7)	0 (0.0)	2 (33.3)	6 (100.0)
	道で会えば挨拶	6 (9.5)	9 (14.3)	15 (23.8)	33 (52.4)	63 (100.0)
	会った際に世間話	8 (14.5)	22 (40.0)	13 (23.6)	12 (21.8)	55 (100.0)
	互いの家を行き来	1 (20.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	3 (60.0)	5 (100.0)
和人老年層	近所付き合いはない	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (50.0)	6 (100.0)
	道で会えば挨拶	3 (3.8)	17 (21.5)	20 (35.3)	39 (49.4)	79 (100.0)
	会った際に世間話	14 (13.2)	26 (24.5)	31 (29.2)	35 (33.0)	106 (100.0)
	互いの家を行き来	6 (21.4)	9 (32.1)	8 (28.6)	5 (17.9)	28 (100.0)
和人　計		44 (11.1)	88 (22.2)	97 (24.4)	168 (42.3)	397 (100.0)
アイヌ系住民	近所付き合いはない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	道で会えば挨拶	1 (50.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	会った際に世間話	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
	互いの家を行き来	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計		46 (11.4)	89 (22.1)	98 (24.4)	169 (42.0)	402 (100.0)

表８－12　アイヌの人々との交流の内容×近所付き合い（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	付き合い無	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	会えば挨拶	1 (2.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (8.3)	3 (8.3)	36 (100.0)
	世間話	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)
	家を行き来	1 (33.3)	2 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
和人壮年層	付き合い無	1 (16.7)	2 (33.3)	1 (16.7)	0 (0.0)	1 (16.7)	0 (0.0)	6 (100.0)
	会えば挨拶	5 (7.9)	7 (11.1)	4 (6.3)	5 (7.9)	3 (4.8)	1 (1.6)	63 (100.0)
	世間話	11 (19.6)	15 (26.8)	1 (1.8)	9 (16.1)	11 (19.6)	4 (7.1)	56 (100.0)
	家を行き来	1 (20.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
和人老年層	付き合い無	1 (16.7)	0 (0.0)	1 (16.7)	0 (0.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	6 (100.0)
	会えば挨拶	6 (7.5)	8 (10.0)	6 (7.5)	1 (1.3)	7 (8.8)	2 (2.5)	80 (100.0)
	世間話	21 (19.8)	15 (14.2)	13 (12.3)	4 (3.8)	5 (4.7)	10 (9.4)	106 (100.0)
	家を行き来	8 (26.7)	2 (6.7)	4 (13.3)	0 (0.0)	4 (13.3)	6 (20.0)	30 (100.0)
和人　計		56 (14.0)	52 (13.0)	31 (7.7)	19 (4.7)	37 (9.2)	27 (6.7)	401 (100.0)
アイヌ系住民	付き合い無	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	会えば挨拶	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	世間話	0 (0..0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
	家を行き来	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計		57 (14.0)	53 (13.1)	31 (7.6)	19 (4.7)	37 (9.1)	28 (6.9)	406 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

続いて、表８－13は自治会活動への参加状況について交流頻度を示したものである。青年層はそもそも自治会活動への参加率が低く（「あまり参加せず」と「まったく参加せず」の合計が75.0％）、その上、自治会活動への積極度に関わりなく「交流ほとんどなし」が６割以上を占めている。そこで、これについても、近所付き合いと同様に、壮年層と老年層に限定して考察する。両世代においては、交流が「ある」と回答する者の比率は、自治会活動への積極度が高い者において順当に高くなっている。すなわち、壮年層では、「積極的に参加している」50.0％、「ある程度参加している」42.6％、「あまり参加していない」37.1％、「まったく参加していない」7.7％、老年層では、「積極的に参加している」43.1％、「ある程度参加している」35.9％、「あまり参加していない」24.3％、「まったく参加していない」16.7％となっている。青年層において活動が低調である点は上でみた近所付き合いと同じである。しかし、壮年層と老年層に関して、自治会活動参加への積極度が交流頻度の高さに結びついており、この点は近所付き合いとは異なる結果となっている。

さて、自治会活動は地域の活動であるため、この活動に積極的に参加するということは地域での交流を増やすことに直結することが予想される。そこで、表８－14中、「近所付き合い」の比率を見ると、自治会活動への積極度がより高い者において、交流が「ある」比率が高い。「交流あり」の数値は、壮年層では、「積極的に参加している」22.7％、「ある程度参加している」17.7％、「あまり参加していない」5.7％、「まったく参加していない」0.0％、老年層では、「積極的に参加している」20.5％、「ある程度参加している」18.3％、「あまり参加していない」7.9％、「まったく参加していない」0.0％となっている。自治会活動とアイヌの人々との近所付き合いに関わる発言には次のようなものがある。

・そこの家も１人でアイヌの人が住んでいるんですけど。そこもアイヌの人です、向かいのお家ね。結構いますよ。うちの隣の隣もそうだし。ちょっと偏屈なんだよね、そこのおじさんね。そしたら、向かいのおばさんが行くと、何かよくけんかするらしいんだけど。町内会費とか集めに行くのは嫌だと言うの、偏屈だから。でも、私が行くと、そうでもないんだよね。人を見るんだねと言うんだよね。「誰だあ」って言うの。「○○です」。「ああ､姉さんか」と言って出てきて、お金をちゃんと払ってくれるし、全然そんな悪い人じゃないんだけど、やっぱり何か気のさわるようなことを言うと怒り出すみたいで。その人はね、いまはお酒を飲まないけど、お酒がすごく好きな人で、お酒を飲むとよく家に来て、１杯くれと言って飲んで、２杯ぐらい飲んだら帰っていくおじさんだったの。（壮年層・女性）
・ちょっと身近にいないので、町内にいないんでちょっとその辺の反応はわかりませんけどね。ですから町内の集まりでもいないんで、アイヌ民族について話すことはないんですよね。（町内会に対してアイヌの人から）こんな催しものあるから来いやとかっていうのはないです。大きいお祭りとか何とかなら町内にポスターみたいの貼らさることはありますけどね。（老年層・男性）

「近所付き合い」以外の交流についても、「積極的に参加している・ある程度参加している」者において、交流が「ある」と回答する比率が相対的に高い。もっとも、この規則性はアイヌ系住民の交流状況（交流頻度、交流内容）にはあてはまらない。彼らの場合、こうした地域の活動を経由せずに個別のつながりによって交流が成立しているためと推察される。

表８－13　アイヌの人々との交流×自治会活動への参加　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	積極的に参加	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	2 (100.0)	2 (100.0)
	ある程度参加	0　(0.0)	0　(0.0)	2 (20.0)	8 (80.0)	10 (100.0)
	あまり参加せず	1　(5.3)	2 (10.5)	2 (10.5)	14 (73.7)	19 (100.0)
	まったく参加せず	1　(5.9)	1　(5.9)	4 (23.5)	11 (64.7)	17 (100.0)
和人壮年層	積極的に参加	7 (31.8)	4 (18.2)	6 (27.3)	5 (22.7)	22 (100.0)
	ある程度参加	6　(9.8)	20 (32.8)	14 (23.0)	21 (34.4)	61 (100.0)
	あまり参加せず	4 (11.4)	9 (25.7)	6 (17.1)	16 (45.7)	35 (100.0)
	まったく参加せず	1　(7.7)	0　(0.0)	3 (23.1)	9 (69.2)	13 (100.0)
和人老年層	積極的に参加	12 (16.7)	19 (26.4)	23 (31.9)	18 (25.0)	72 (100.0)
	ある程度参加	10　(9.7)	27 (26.2)	28 (27.2)	38 (36.9)	103 (100.0)
	あまり参加せず	2　(5.4)	7 (18.9)	8 (21.6)	20 (54.1)	37 (100.0)
	まったく参加せず	0　(0.0)	2 (16.7)	3 (25.0)	7 (58.3)	12 (100.0)
和人　計		44 (10.9)	91 (22.6)	99 (24.6)	169 (41.9)	403 (100.0)
アイヌ系住民	積極的に参加	0　(0.0)	1 (50.0)	0　(0.0)	1 (50.0)	2 (100.0)
	ある程度参加	1 (33.3)	0　(0.0)	2 (66.7)	0　(0.0)	3 (100.0)
	あまり参加せず	1 (100.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	1 (100.0)
	まったく参加せず	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)
	合計	46 (11.2)	92 (22.5)	101 (24.7)	170 (41.6)	409 (100.0)

表８－14　アイヌの人々との交流の内容×自治会活動への参加（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	積極的	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	ある程度	0 (0.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	あまりせず	1 (5.3)	1 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.3)	1 (5.3)	19 (100.0)
	参加せず	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (11.1)	2 (11.1)	18 (100.0)
和人壮年層	積極的	5 (22.7)	5 (22.7)	2 (9.1)	0 (0.0)	3 (13.6)	4 (18.2)	22 (100.0)
	ある程度	11 (17.7)	10 (16.1)	3 (4.8)	13 (21.0)	8 (12.9)	0 (0.0)	62 (100.0)
	あまりせず	2 (5.7)	9 (25.7)	2 (5.7)	1 (2.9)	5 (14.3)	1 (2.9)	35 (100.0)
	参加せず	0 (0.0)	2 (15.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (100.0)
和人老年層	積極的	15 (20.5)	11 (15.1)	7 (9.6)	3 (4.1)	8 (11.0)	8 (11.0)	73 (100.0)
	ある程度	19 (18.3)	11 (10.6)	14 (13.5)	2 (1.9)	6 (5.8)	9 (8.7)	104 (100.0)
	あまりせず	3 (7.9)	3 (7.9)	3 (7.9)	0 (0.0)	3 (7.9)	2 (5.3)	38 (100.0)
	参加せず	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	1 (8.3)	12 (100.0)
和人　計		57 (14.0)	53 (13.0)	31 (7.6)	19 (4.7)	37 (9.1)	28 (6.9)	408 (100.0)
アイヌ系住民	積極的	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	ある程度	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
	あまりせず	1 (100.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
	参加せず	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計		59 (14.3)	54 (13.0)	31 (7.5)	19 (4.6)	37 (8.9)	29 (7.0)	414 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

第４項　職業生活

ここでは、職業によって交流状況がどのように異なるのかを見る。職場はアイヌの人々との交流が生まれる一つの場と考えられる。どのような職業においてアイヌの人々との交流が多くもたれるのだろうか。前節で見たとおり、漁業従事者へのインタビューにおいては、仕事仲間としてのアイヌの人々と長年にわたって密な関係が築かれてきたことが語られている。

表８－15は職業別に交流頻度をまとめたものである。一覧すると、交流が「ある」と回答する者の比率は、新ひだかほどではないが、伊達よりは全体に高い水準にある。そこで、「交流あり」の比率が高い順に職業を列挙すると、青年層では、「サービス的」と「その他」が同率で33.3%、「技能工・生産工程」28.6%、「事務的」25.0%、壮年層では、「管理的」100%、「販売的」と「技能工・生産工程」が同率50.0%、「事務的」44.5%、「その他」44.4%、「サービス的」40%、「専門・技術的」38.5%、「農林水産的」36.4%、「運輸･通信的」28.6%、「保安的」25.0%、老年層では、「事務的」83.3%、「販売的」75.0%、「専門･技術的」66.6%、「サービス的」57.1%、「農林水産的」55.5%、「管理的」50.0%、「運輸･通信的」44.4%、「技能工･生産工程」41.7%、「その他」23.1%、「保安的」0.0%となる。これを見ると、新ひだかや伊達において指摘されたように、「ブルーカラーに分類される職業（保安的、販売的、技能工・生産工程、運輸・通信的、農林水産的、サービス的）に従事する者において、ホワイトカラー職（事務的、専門・技術的、管理職）よりも多くの交流がもたれている」といえるほどの明確な傾向は認められないことがわかる。

では、職業別に交流内容を見るとどのようなことがいえるだろうか。表８－16に職業毎の交流内容の特徴を探ってみよう。職場付き合いの程度や、職場での付き合いが職場を超えて拡がってい

るかどうかに注目すると、交流頻度の場合と同じく、ブルーカラー職とホワイトカラー職それぞれの傾向に大きな違いがあるとはいえない。仕事を通じての出会いがどのような交流に育っていくのかは、仕事の種類だけではなく、そこにおいて具体的にどのような関わりがあるのかに大きく規定されるだろう。それを知るためには、他の条件とも関わらせながらさらに探っていく必要があると思われる。

表８－15　アイヌの人々との交流×職業　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	事務的職業	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (75.0)	4 (100.0)
	保安的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)	2 (100.0)
	販売的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)	3 (100.0)
	技能工・生産工程	1 (14.3)	1 (14.3)	2 (28.6)	3 (42.9)	7 (100.0)
	運輸・通信	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	専門・技術的	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (22.2)	7 (77.8)	9 (100.0)
	管理的	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	農林水産的	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	2 (66.7)	3 (100.0)
	サービス的	0 (0.0)	1 (33.3)	0 (0.0)	2 (66.7)	3 (100.0)
	その他	1 (33.3)	0 (0.0)	1 (33.3)	1 (33.3)	3 (100.0)
和人壮年層	事務的職業	3 (16.7)	5 (27.8)	5 (27.8)	5 (27.8)	18 (100.0)
	保安的職業	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (75.0)	4 (100.0)
	販売的職業	0 (0.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	4 (100.0)
	技能工・生産工程	0 (0.0)	5 (50.0)	1 (10.0)	4 (40.0)	10 (100.0)
	運輸・通信	1 (14.3)	1 (14.3)	0 (0.0)	5 (71.4)	7 (100.0)
	専門・技術的	2 (15.4)	3 (23.1)	3 (23.1)	5 (38.5)	13 (100.0)
	管理的	2 (50.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	農林水産的	1 (9.1)	3 (27.3)	4 (36.4)	3 (27.3)	11 (100.0)
	サービス的	2 (20.0)	2 (20.0)	3 (30.0)	3 (30.0)	10 (100.0)
	その他	1 (11.1)	3 (33.3)	1 (11.1)	4 (44.4)	9 (100.0)
和人老年層	事務的職業	3 (50.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	0 (0.0)	6 (100.0)
	保安的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	販売的職業	2 (25.0)	4 (50.0)	1 (12.5)	1 (12.5)	8 (100.0)
	技能工・生産工程	0 (0.0)	5 (41.7)	2 (16.7)	5 (41.7)	12 (100.0)
	運輸・通信	2 (22.2)	2 (22.2)	2 (22.2)	3 (33.3)	9 (100.0)
	専門・技術的	2 (33.3)	2 (33.3)	1 (16.7)	1 (16.7)	6 (100.0)
	管理的	1 (25.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
	農林水産的	3 (33.3)	2 (22.2)	2 (22.2)	2 (22.2)	9 (100.0)
	サービス的	0 (0.0)	4 (57.1)	1 (14.3)	2 (28.6)	7 (100.0)
	その他	1 (7.7)	2 (15.4)	4 (30.8)	6 (46.2)	13 (100.0)
和人　計		29 (14.6)	53 (26.8)	38 (19.2)	78 (39.4)	198 (100.0)
アイヌ系住民	技能工・生産工程	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
	サービス的	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
	合計	30 (15.0)	53 (26.5)	39 (19.5)	78 (39.0)	200 (100.0)

表８－16　アイヌの人々との交流の内容×職業（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	事務的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	保安的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	販売的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
	技能工・生産工程	1 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (14.3)	1 (14.3)	7 (100.0)
	運輸・通信的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	専門・技術的職業	0 (0.0)	1 (11.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (100.0)
	管理的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	農林水産的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
	サービス的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	0 (0.0)	3 (100.0)
	その他	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
和人壮年層	事務的職業	1 (5.3)	6 (31.6)	2 (10.5)	2 (10.5)	1 (5.3)	1 (5.3)	19 (100.0)
	保安的職業 .	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	販売的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	技能工・生産工程	2 (20.0)	3 (30.0)	1 (10.0)	2 (20.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	運輸・通信的職業	1 (14.3)	1 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (100.0)
	専門・技術的職業	1 (7.1)	3 (21.4)	1 (7.1)	2 (14.3)	2 (14.3)	1 (7.1)	14 (100.0)
	管理的職業	0 (0.0)	2 (50.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	農林水産的職業	4 (36.4)	2 (18.2)	0 (0.0)	1 (9.1)	2 (18.2)	0 (0.0)	11 (100.0)
	サービス的職業	1 (10.0)	3 (30.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (30.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	その他	1 (11.1)	2 (22.2)	0 (0.0)	2 (22.2)	1 (11.1)	0 (0.0)	9 (100.0)
和人老年層	事務的職業	2 (33.3)	2 (33.3)	0 (0.0)	2 (33.3)	0 (0.0)	1 (16.7)	6 (100.0)
	保安的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	販売的職業	2 (22.2)	2 (25.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	4 (50.0)	1 (12.5)	8 (100.0)
	技能工・生産工程	1 (16.7)	3 (25.0)	3 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (100.0)
	運輸・通信的職業	0 (0.0)	1 (11.1)	1 (11.1)	1 (11.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (100.0)
	専門・技術的職業	3 (30.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (33.3)	6 (100.0)
	管理的職業	2 (28.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
	農林水産的職業	3 (30.0)	3 (30.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	サービス的職業	2 (28.6)	2 (28.6)	3 (42.9)	0 (0.0)	1 (14.3)	0 (0.0)	7 (100.0)
	その他	2 (15.4)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	0 (0.0)	1 (7.7)	13 (100.0)
和人　計		26 (12.9)	41 (20.4)	17 (8.5)	14 (7.0)	22 (10.9)	11 (5.5)	201 (100.0)
アイヌ系住民	技能工・生産工程	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
	サービス的職業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
合計		26 (12.8)	41 (20.2)	17 (8.4)	14 (6.9)	22 (10.8)	12 (5.9)	203 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

第５項　アイヌへ文化への関心

それでは、次に、アイヌの歴史や文化への関心の持ち方と交流状況の関係を見る。アイヌの歴史や文化への関心をはかる指標としては、アイヌ文化に関する知識の有無、アイヌ文化に関する体験の有無、アイヌ文化に関する体験への関心、の３つがある。すなわち、アイヌ固有の歴史・文化・伝統に関する知識を身につけ、その文化に触れるための行動を自ら起こし、あるいは、その文化に触れるための行動への意志を持つことは、アイヌの人々に対する関心の表れであり、彼らとの交流のきっかけを提供し、その交流を豊かなものにすると考えられる。

はじめに表８－17をみよう。交流頻度をアイヌ文化に関する知識の有無別に整理したものであ

る。アイヌ文化を「知っている」者においては「知らない」者に比して、交流が「ある」と回答する比率が高いのだろうか。世代毎に「交流あり」の比率を見ると、青年層では、「知っている」10.3%、「知らない」10.5%、壮年層では、「知っている」49.3%、「知らない」25.0%、老年層では、「知っている」54.2%、「知らない」22.0%となっている。これを見ると、青年層では知識の有無と交流頻度の違いは僅かなものであるが、世代が高くなると、知識を持つ者と知識をもたない者の差が大きくなっていることがわかる。年齢を重ねるうちに、アイヌ文化に関する知識の有無が、アイヌの人々との交流という行動に結びつくかどうか、そして、交流が維持されるかどうかに大きく影響するようになると考えられる。

では、知識の有無によって交流の内容に違いは表れるのだろうか（表８－18）。唯一、青年層の「学生時代からの付き合い」については、「知っている」3.2%、「知らない」10.5%であり、知識を持っていることがより多くの交流が行われることに結びついていない。若い世代にとっての学校友だちとは知識の有無で決まるものではないが、その交流が続くためには、知識が必要ということだろうか。壮年層と老年層について「学生時代からの付き合い」を見ると、「知っている」者の方において交流が「ある」比率が高い。その他の交流に関しては、「知っている」と回答する者の「交流あり」の比率の方が高く、知識の有無によるその数値の違いは、壮年層・老年層においては、青年層とくらべものにならないほど大きいものとなっている。

表８－17　アイヌの人々との交流×アイヌ文化の知識有無　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	知っている	2　(6.9)	1　(3.4)	3　(10.3)	23　(79.3)	29 (100.0)
	知らない	0　(0.0)	2　(10.5)	4　(21.1)	13　(68.4)	19 (100.0)
和人壮年層	知っている	14　(20.9)	19　(28.4)	16　(23.9)	18　(26.9)	67 (100.0)
	知らない	4　(6.7)	11　(18.3)	12　(20.0)	33　(55.0)	60 (100.0)
和人老年層	知っている	19　(20.2)	32　(34.0)	22　(23.4)	21　(22.3)	94 (100.0)
	知らない	4　(3.7)	20　(18.3)	33　(30.3)	52　(47.7)	109 (100.0)
和人　計		43　(11.4)	85　(22.5)	90　(23.8)	160　(42.3)	378 (100.0)
アイヌ系住民	知っている	1　(20.0)	1　(20.0)	2　(40.0)	1　(20.0)	5 (100.0)
	知らない	1 (100.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	1 (100.0)
合計		45　(11.7)	86　(22.4)	92　(24.0)	161　(41.9)	384 (100.0)

表８－18　アイヌの人々との交流の内容×アイヌ文化の知識有無（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	知っている	2　(6.5)	2　(6.5)	0　(0.0)	0　(0.0)	1　(3.2)	2　(6.5)	31 (100.0)
	知らない	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	2 (10.5)	0　(0.0)	19 (100.0)
和人壮年層	知っている	12 (17.6)	15 (22.1)	5　(7.4)	8 (11.8)	13 (19.1)	5　(7.4)	68 (100.0)
	知らない	3　(4.9)	10 (16.4)	2　(3.3)	4　(6.6)	3　(4.9)	0　(0.0)	61 (100.0)
和人老年層	知っている	21 (22.1)	15 (15.8)	14 (14.7)	2　(2.1)	12 (12.6)	13　(13.7)	95 (100.0)
	知らない	1 (14.9)	9　(7.9)	8　(7.0)	2　(1.8)	6　(5.3)	6　(5.3)	114 (100.0)
和人　計		55 (14.2)	51 (13.1)	29　(7.5)	16　(4.1)	37　(9.5)	26　(6.7)	388 (100.0)
アイヌ系住民	知っている	2 (40.0)	1 (20.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	5 (100.0)
	知らない	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
合計		57 (14.5)	52 (13.2)	29　(7.4)	16　(4.1)	37　(9.4)	27　(6.9)	394 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

次に、アイヌ文化に関する体験の有無と交流状況を表８－19で確認する。それによると、アイヌ文化に関する体験が「ある」と回答する者において、交流が「ある」比率は確実に高い。「交流あり」を世代毎に見ると、青年層では、「体験あり」15.8%、「体験なし」6.7%、壮年層では、「体験あり」80.0%、「体験なし」29.7%、老年層では、「体験あり」89.2%、「体験なし」25.4%である。これらの数値を見ると、世代が上がるに従って、体験の有無が交流に与える影響の差が拡大する。つまり、「交流あり」の数値を「体験あり」と「体験なし」とで比較すると、青年層では2.4倍であるのが、壮年層では2.7倍、老年層では3.5倍である。アイヌ文化に関する知識の場合と同様に、青年層においては、アイヌ文化に関する体験をもたないことが交流の支障とはなりにくいが、壮年層、老年層ともなると、文化体験を持つことがより多くの交流が行われることにつながる。その際、知識の有無と比べて体験の有無の影響の方が大きいことをどのように理解すればよいのだろうか。一般に、知識を身につけることよりも、体験することの方がより能動的な姿勢を必要とする。ゆえに、アイヌ文化に関わる体験をした者はアイヌの人々をより深く理解することになり、結果として、交流をする者が増えるということではないだろうか。

さらに、表８－20の交流内容を見ると、知識の有無の場合と同様、青年層の「学生時代からの付き合い」を除いては、「体験あり」と回答する者において交流が「ある」の比率の方が高く、体験の有無による「交流あり」の比率の差は、青年層より壮年層・老年層においてより大きい。

表８－19　アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験有無　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	体験あり	2 (10.5)	1 (5.3)	2 (10.5)	14 (73.7)	19 (100.0)
	体験なし	0 (0.0)	2 (6.7)	6 (20.0)	22 (73.3)	30 (100.0)
和人壮年層	体験あり	7 (35.0)	9 (45.0)	4 (20.0)	0 (0.0)	20 (100.0)
	体験なし	8 (7.9)	22 (21.8)	22 (21.8)	49 (48.5)	101 (100.0)
和人老年層	体験あり	9 (32.1)	16 (57.1)	3 (10.7)	0 (0.0)	28 (100.0)
	体験なし	10 (6.7)	28 (18.7)	44 (29.3)	68 (45.3)	150 (100.0)
和人　計		36 (10.3)	78 (22.4)	81 (23.3)	153 (44.0)	348 (100.0)
アイヌ系住民	体験あり	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	5 (100.0)
	体験なし	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
合計		38 (10.7)	79 (22.3)	83 (23.4)	154 (43.5)	354 (100.0)

表８－20　アイヌの人々との交流の内容×アイヌ文化の体験有無（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	体験あり	2 (10.5)	2 (10.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.3)	2 (10.5)	19 (100.0)
	体験なし	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.3)	1 (3.1)	32 (100.0)
和人壮年層	体験あり	5 (25.0)	5 (25.0)	4 (20.0)	3 (15.0)	6 (30.0)	4 (20.0)	20 (100.0)
	体験なし	10 (9.7)	19 (18.4)	3 (2.9)	9 (8.7)	10 (9.7)	1 (1.0)	103 (100.0)
和人老年層	体験あり	12 (41.4)	9 (31.0)	8 (27.6)	1 (3.4)	3 (10.3)	8 (27.6)	29 (100.0)
	体験なし	20 (12.9)	13 (8.4)	11 (7.1)	4 (2.6)	10 (6.5)	9 (5.8)	155 (100.0)
和人　計		49 (13.7)	48 (13.4)	26 (7.3)	17 (4.7)	32 (8.9)	25 (7.0)	358 (100.0)
アイヌ系住民	体験あり	2 (40.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
	体験なし	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
合計		51 (14.0)	49 (13.5)	26 (7.1)	17 (4.7)	32 (8.8)	26 (7.1)	364 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

それでは、アイヌ文化に関する体験をまだもたない場合、その体験をしたいという希望の有無が、交流状況を左右することはあるのだろうか。これは体験の有無ではなく、体験を得たいという「意志」の有無そのものがもたらす効果を問うものである。表８－21によれば、交流が「ある」と回答する比率は、圧倒的に「希望あり」の者において高い。青年層では、「希望あり」20.0%、「希望なし」7.9%、壮年層では、「希望あり」65.2%、「希望なし」29.1%、老年層では、「希望あり」48.1%、「希望なし」26.3%である。壮年層の「希望あり」の数値がとくに高い。本節の冒頭で、白糠におけるアイヌの人々との交流場面では、老年層（35.4%）よりも壮年層（39.2%）において「交流あり」の比率が若干高くなっている点が指摘されたが、その理由を考える上で、このことがひとつのヒントを与えてくれるのではないだろうか。

表８－22は、アイヌ文化に関する体験希望有無と交流内容をまとめたものである。「希望あり」と回答する者において、「交流あり」の項目を数値の高い順に３つあげると（その他を除く）、青年層では、「近所付き合い」「職場付き合い」「学生時代からの付き合い」が同率の10.0%、壮年層では、「近所付き合い」29.2%、「職場付き合い」「学生時代からの付き合い」が同率の20.8%、老年層では、「近所付き合い」24.1%、「趣味の付き合い」20.7%、「職場付き合い」10.3%となる。これを見ると、どの世代においても、「近所付き合い」の比率が最も高い。それに次いで、青年層では「学生時代からの付き合い」、働き盛りの壮年層では「職場付き合い」、退職世代の老年層では「趣味の付き合い」がそれぞれあげられている。世代によるライフスタイルの違いを映した形となっている。

表８－21　アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験希望有無　（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人青年層	希望あり	1 (10.0)	1 (10.0)	4 (40.0)	4 (40.0)	10 (100.0)
	希望なし	1 (2.6)	2 (5.3)	4 (10.5)	31 (81.6)	38 (100.0)
和人壮年層	希望あり	5 (21.7)	10 (43.5)	6 (26.1)	2 (8.7)	23 (100.0)
	希望なし	9 (9.7)	18 (19.4)	20 (21.5)	46 (49.5)	93 (100.0)
和人老年層	希望あり	4 (14.8)	9 (33.3)	7 (25.9)	7 (25.9)	27 (100.0)
	希望なし	10 (6.9)	28 (19.4)	43 (29.9)	63 (43.8)	144 (100.0)
和人　計		30 (9.0)	68 (20.3)	84 (25.1)	153 (45.7)	335 (100.0)
アイヌ系住民	希望あり	2 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
合計		32 (9.5)	68 (20.1)	84 (24.9)	154 (45.6)	338 (100.0)

表８－22　アイヌの人々との交流の内容×アイヌ文化の体験希望有無（アイヌ性別・世代別）

		度数（%）						合計
		近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	学生時代からの付き合い	その他	
和人青年層	希望あり	1 (10.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (10.0)	3 (30.0)	10 (100.0)
	希望なし	1 (2.5)	1 (2.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.0)	0 (0.0)	40 (100.0)
和人壮年層	希望あり	7 (29.2)	5 (20.8)	2 (8.3)	3 (12.5)	5 (20.8)	4 (16.7)	24 (100.0)
	希望なし	6 (6.4)	18 (19.1)	4 (4.3)	9 (9.6)	10 (10.6)	0 (0.0)	94 (100.0)
和人老年層	希望あり	7 (24.1)	3 (10.3)	6 (20.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (20.7)	29 (100.0)
	希望なし	18 (12.2)	14 (9.5)	11 (7.4)	4 (2.7)	11 (7.4)	8 (5.4)	148 (100.0)
和人　計		40 (11.6)	42 (12.2)	23 (6.7)	16 (4.6)	29 (8.4)	21 (6.1)	345 (100.0)
アイヌ系住民	希望あり	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	希望なし	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
合計		41 (11.8)	43 (12.4)	23 (6.6)	16 (4.6)	29 (8.3)	22 (6.3)	348 (100.0)

注）それぞれについて「あり」と回答した数と％を記載

第３節　私的な交流としての結婚

ここまで、生活史における交流と現在の生活における交流を見てきた。最後に、結婚について検討する。結婚は、人と人を結ぶ交流のうちでも、きわめて私的で親密な特別の関係性である。法律によって承認された公的な結びつきであり、その意味で、結婚の選択は、個人的な出来事であると同時に、家族・親族の強い関心事でもある。したがって、他の交流に対するよりは慎重とならざるをえず、当事者としては選択的、家族・親族としては干渉的な態度が見られることも予想される。そこに表れる本音と建前の矛盾とはいかなるものなのだろうか。

住民の語りを見ると、自分の周辺の出来事として、あるいは、伝え聞いた話として、和人とアイヌの結婚のことが話題に上ることはない。アイヌの血筋が薄くなりつつあるとの発言はたしかにあるが（だから一世が少なくなって二世、三世なるしょ。もう二世、三世ったらやっぱり 60 年や 70 年経ってるっていうことでしょ？…したらやっぱし、アイヌ人でなくなるのさ、今度。顔見ても。（壮年男性））といった発言はあるが、「和人とアイヌの結婚」に焦点を当てたものではない。同内容のインタビューをした新ひだかと伊達、とくに新ひだか住民においては、「和人とアイヌの結婚」に関する具体的なエピソードを持つ者が多くみられたが、白糠住民においては、そもそも、「和人とアイヌの結婚、和人とアイヌの結婚の増加」という話題に対する反応そのものが鈍いとの印象を受ける。この点がまず指摘される。和人とアイヌの結婚のケースが周囲にまったくないわけではないと思われるが、ただ、自分たちが暮らす地域の身近な話題として共有されるところまではいかないためと推察される。これはどの世代についてもいえることである。

しかし、「アイヌとの結婚」のことを一般的な話題としてではなく、自分あるいは自分の家族の問題として問うた時の答えは世代によって異なる傾向をみせる。すなわち、青年層・壮年層においては、「気にしない」「気にしなかった」という言葉が聞かれるのに対して、老年層では、一言ではいえないようなアンビバレントな感情が自分の中にあることが告白されるのである。まず、青年層や壮年層の発言は以下のようなものである。

・全然気にしないですね。それどころか周りすらもだからどうしたみたいな感じじゃない？ だから、差別的なものが自分の習慣でないから。（青年層・男性）
・いや、それはなかった、とくにアイヌがとかっていうことはないし、確実にうちの親もそういう人じゃないので。（青年層・女性）
・いやぁ、なかったね。気にしなかったね。嫁も元々、白糠の地元の人間だから、それでもとくにはなかったな。（壮年層・男性）

これに対して、老年層では、結婚をめぐる自分たちの考え方に差別的な思考が潜んでいること、それゆえに結婚は簡単な問題ではないと語る者が少なからず存在する。注目すべきは、これらの人々は、結婚をめぐる本音と建前の矛盾について十分に自覚的であるということである。彼らは、和人とアイヌの人々の間に乗り越えがたい壁があることを否定しない。といって、そのような壁が存在することを積極的に肯定することもしない。また、和人が優越しているという強い主張があるわけでもない。むしろ、自分のなかの「壁」が強固であることに困惑し、その「壁」をどうすることもできない自分の弱さを再認識する姿が見られる。ある老年女性は、親族が本州で結婚した際に、「北

海道の流れ者はいらん」「流れ者の子どもは嫁にいらん」と言われた経験から、「結局、だから、何の差別とかっていうんだったら、ね、そういう人種とかじゃなくて、人間的なものは和人であろうが、シャモであろうが、アイヌであろうが、いい人やら悪い人いますから、そういうのはありますけど、そんなにはアイヌとかって。」と考えるようになったことを語るが、このようにアイヌの人々に対する自分のスタンスが定まっているケースは少ない。以下、長くなるが、本音と建前の矛盾についての自省的な語りを掲げる。

・いま白糠でアイヌ差別というのは、私はそれほどひどいものはないと思っています。職業の差別もないし、結婚の差別もよそから比べたらそんなにないと思います。…（民族性を気にすることは）ないです。うちの家内もそういうものはなかった。ところがウタリ福祉をやってから、そういうものを意識するようになった。それだけ根深いものがあるんだよね。人間の生きている中で、淵というものがあるじゃない。表面はなだらかなんだけど、どこかに深みみたいなのがあって、あるじゃない。そこにあたらなかったらそのまま行けるんだけど、見なくて済んだらいいのに、見ちゃうと真実がわかっちゃう。そういう、うまく言えないけど、ウタリ福祉をやってよかったというのは、自分としては差別というのは、これは仕方ないと。これは最初に言ったように自分とは異なる人たちがいるんだということ。それを受け入れることが出来るかどうかということ。（老年層・男性）
・触れることがタブーというのが植えつけられたことがあったと思うのですよ、子どもの時から。さっきも言ったように、僕の姪っ子が結婚した血筋にアイヌの人がいて結婚すると聞いた時に「誰と？」と頭によぎるのがそれなんだよね。きっと僕らの年代ですよ、今の人はどうかわからないけど。それはきっと、だからって反対とかどうのこうのではなくて、頭の中に１番それが気になる部分。でもそれは口に出して「本家筋にアイヌだろう」とかそこまで露骨に言うことはないと思うけど、どこかでみんな我々の年代以上の人たちはとくにそれを感じるのかもわからないですね。…結婚もそうだろうし、避けて通れるものだったら避けてくれた方がいいという思いが、未だにどこかにあると思いますね。だからすごい根深いと思うんだよね。何があったのか。外見だと変な話、２世３世になると、女の人は美人だなと。でもルーツを辿って行くとそこに行くんだよな、というような根深い部分があって、それが何を気にしているのかわからないけど、日常生活の中で未だに我々の年代でもどこかでありますよね、アイヌ民族に対して。（老年層・男性）
・こんな意識ないね。ま、こういう環境にもなかったからね。好きになったらするわね、うん。好きになったら、多分してるでしょ。…ただ、好きになったら、そうだね。これはさ、見合いだのなんだのっていうことになったら考えるだろうね。それは何故考えるかって言ったら、僕は見合いと結婚とは違うと思ってるから。見合いと恋愛とはね。結婚はね、これは半分気の迷いも入ってんだ。だから、その気の迷いが入ってるけれども、恋愛してる時はね、この気の迷いも気が付かないんだね。だけど、見合いとなったら多分この気の迷いに気が付くことが多いんじゃないか。それで、考えて調べてみたらこの女性アイヌだったと…そしたら、アイヌに対するその感覚というものが又新しく出てくるんじゃない？そこで、知らないなりにそのアイヌという考え方に…何ちゅうかな…反論してくるんじゃないかな。うん。知っていて恋愛するのと見合いで知らされるのとは違うと思うんだよね。（老年層・男性）

・これね、難しいよね。要するに自分の今の立場でものを言うと、そういうようなことを要するにアイヌというひとつのくくりの部分があって、そういうのが別に差別するわけじゃないけど、やっぱり両人の中が一番だよっていうことだとは思っているけども、これが自分の子どもとなれば、本当に冷静にそういうことを言えるんだろうかっていうことは、これは事実だよね。２人ともそういうような方面の方々とは一緒にはならなかったんだけども、娘の折なんだけどね、娘がイギリスにちょっと行ってたんだけど、その時に黒人、黒人っていったらあれだけど、黒人と一緒になったらどうしようかって話になったことがあったんだけどね。自分の立場だったら一概にはやっぱり今言えないよね。…わが事として考えたらどうなんだろう。やっぱり美しいことは言っていられないんじゃないかね。なぜなんだろうっていうことは言うかもしれないよね。でも徹底的に反対はもうどうしようもないと思うよね。最後は許すと思うけど、やっぱり紆余曲折はあるんじゃないかなという気はするよね。冷静に物は見れないかもしれない。（老年層・男性）
・ああ、やっぱり、そんなこと言ったら悪いんだけども、ああ、ちょっと違うかなっていうのはありますよね。でも、やっぱりそういうことを口に出しちゃいけないと思うんで。…息子２人ですけども、もしお嫁さんにそういう人を選んだら、でも、息子が選んだんだったら反対しない、でも、子どもにやっぱり出るっていうのがあるから、ひょっとしたら反対す…ちょっと、ちょっとは言うかもしんないですね。一度ぐらい、ちょっと言ってきかせる、それでもしたいって言うんだったら、もうそれは本人の人生だから、最終的には本人の意志だからね、本人に任せるしかないんでしょうけれども。（老年層・女性）
・親に反対されて、やっぱりね。もちろん兄弟からも、もう、それならそれでいいよみたいな生き方してるから私は。そんなそれが何なのみたいなね。だから、親とも本当にもう、それで何回もね、喧嘩したけど、もう母親もいなくなっちゃたけど、喧嘩したよ、やっぱり、電話で。で、やっぱりね、本当に自分の親がそういう風な、なんて言うの、偏見の目で見る、そういう親に生まれた私は情けないって言って泣いてくってかかったけど。（アイヌ系住民、老年女性、前夫がアイヌ男性）

このように、住民の態度には、「アイヌの人々を特別視しないで付き合うが身内の結婚に関しては忌避感情が消えない」という二重基準を認めることができる。それは、一般論として問われた場合よりも、当事者（自分あるいは自分の家族）の結婚を想定して問われた場合にとくに顕著であり、自分の結婚を想定して語る青年層よりも、自分より下の世代の結婚のことも含めて考える老年層においてより自覚的である。これらは、新ひだかの住民についても、伊達の住民についても同様に指摘されてきた点である。

ただし、その語り口を地域ごとに比較してみると、新ひだかの住民には「アイヌ差別が依然存在するから」「アイヌとわかる特徴を持った子どもは差別されるから」という理由をあげて結婚を望まないとはっきりと語る者が目立ち、一方、伊達では、そこまで直截的な態度が表明されることはないという違いがある。ここで、白糠の住民について見るなら、アイヌとの結婚を、一家の利害関係に関わる重大な事案として忌避するのでもなく、といって、「考えたことがない、わからない」と慎重に答えるのでもなく、自制的で自省的、そして分析的な意見が述べられているところに特徴があるといえるだろう。この違いはなにに由来するのだろうか。ひとつ考えられるとすれば、アイ

ヌの人々との結婚が、住民のなかで、あり得ること・現実的なこととして受けとめられている場合には自己の利害関係に敏感なとらえ方になり、一方、そうした事態に直面するかもしれないとの認識が強くない場合には観念的なとらえ方になるのではないだろうか。

おわりに

アイヌの人々と交流が「ある」(「よくある」「たまにある」の合計)住民は全体のおよそ３割である。そのおよそ３割の交流実態を見てきた。上の世代の住民は、アイヌの人々に関わる記憶を若い世代に比して豊かに持ち、交流も若い世代より多くおこなっており、よりはっきりとした好悪の感情を示していた。一方、若い世代においては、アイヌの人々に対する強い感情は見出しがたく、交流も相対的に希薄であった。この全体像をふまえて、考察の結果導き出されたことを整理しておこう。

まず、生活史におけるアイヌの人々との交流について。第１に、生活の場面については、壮年層や老年層においてはアイヌの人々に関するエピソードが語られるものの、それは個人的な交友関係についてではなく、アイヌの人々を見た・話を聞いたというものが多く、住民とアイヌの人々とは距離をおいた間柄であった。第２に、学校の場面においては、子ども同士の関係においては、違和感があったとしても、それがただちに激しい差別につながることはなかった。しかし、教師による差別的な言動を目撃した記憶は、当時の「何もできなかった自分」を思い出させ、今もなお重く受けとめられている。第３に、仕事の場面を見ると、仕事に関わるアイヌの人々との関係は一時期のエピソードとして語られるものがほとんどであった。例外的に、漁業従事者だけは、数十年にわたる仕事仲間として、アイヌの人々と家族ぐるみの交流を続けていた。

続いて、現在の生活における交流を５つの視点から考察した結果をもとに、交流頻度に関してまとめておく。第１に、男女による交流状況の違いを見ると、とくに壮年層において女性の「交流あり」の比率が男性より高く、就労・家庭生活・育児などをめぐって男女が社会に占める位置の違いが反映されていると推察された。第２に、地域への根づき方という点から見ると、地元に生まれ育った者、白糠地区に居住する者において、「交流あり」と回答する者の比率が相対的に高かった。定住志向に関しては、「ずっと住みたい」者は「移る予定がある」者に比べれば「交流あり」の傾向が高かったが、「移りたい」という回答者の交流志向について十分にとらえることはできなかった。第３に、地域の諸活動と交流状況の関係を見ると、自治会活動参加への積極度は明らかに交流頻度の高さに結びついていたが、一方、近所付き合いの場合は、付き合いの深さがアイヌの人々とのより密な交流に直結するわけではなかった。第４に、職業という点から見ると、ブルーカラー職においてホワイトカラー職に比して交流が多いということはいえないことがわかった。第５に、アイヌ文化への関心に注目して交流を見ると、上の世代においては、アイヌ文化の知識が有る者において「交流あり」の比率は高い。また、すべての世代について、アイヌ文化に関する体験が有る者と体験希望を持つ者において「交流あり」の比率は確実に高いという結果であった。

最後に、結婚をめぐる住民の態度については、とくに老年層において、「アイヌの人々を特別視しないで付き合う」が「結婚に関しては否定的」という二重性が見られたことがあげられる。

さて、上記の諸点のうち、現代の生活における交流に関して、アイヌ系住民に限って見るならば、和人に比べてアイヌの人々との交流頻度が高いなかで、男性より女性の方がより多くの交流をしており、地元の生まれ育ちであることと白糠地区に居住することが「交流あり」の比率の高さにつな

がっていた。しかし、定住志向を持つことがより多くの交流をもたらすとはいえなかった。近所付き合いについては、より深く付き合っている者において交流の頻度は高まり、逆に、自治会活動に積極的に参加する者において必ずしも多くの交流をしているわけではなかった。職業については、ホワイトカラー職従事者が回答していないため、職種による交流頻度の違いについて知ることはできなかった。また、アイヌ文化への関心については、関心の有無と交流頻度に関連性は見いだせなかった。回答者数がきわめて少なく、ここからアイヌ系住民にとっての交流の特徴を抽出することは難しいが、地域社会の一員としての交流よりも、個人的なつながりによる交流の比重が高いことは十分に考えられることである。さらなる調査・研究がまたれる。

以上、住民とアイヌの人々との交流状況を見てきた。これからの社会を担う若い世代にとって、アイヌの人々との交流とはどのような意味を持つものなのか、どうあるべきなのか。今の若い世代は、たとえば第３節で見たような「結婚をめぐっての相反する思い」のようなものをどのように超えていくのか。あるいは、すでに超えているのか。今後も注目していきたい。

参考文献

小内透編著 , 2013,『調査と社会理論・研究報告書 30　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 .

————, 2014,『調査と社会理論・研究報告書 31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 .

（小野寺理佳）